

原 著

# 看護学生による保育園での健康教育の学び

## Learuning of the healthy education in the nursery shool by the nursing student

原田 美枝子

Mieko HARADA

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：健康教育 保育園 園児 看護学生

### I. はじめに

本学看護学科の小児看護学実習は、子どもの成長・発達を理解して、健全な育成を目指してあらゆる健康段階にいる子どもと家族に対して看護を理解する事を目的として、医療施設と保育園・障害施設で行っている。小児実習の中で保育園を取り入れている大学は85%で実施されている。その実習期間は短く平均2.7日である。本学においても、保育園実習は1～2日間と短かった。平成25年度に実習施設の小児病棟の縮小や閉鎖に伴い、平成26年度から保育園実習期間2日から3日間とし、見学実習中心であった実習内容に新たに園児を対象とした健康教育に関する集団指導を行う（以下健康教育とする）プログラムを加えた。ねらいは、直接小児と触れ合って、共に生活し一緒に遊びながら健康な子どもについて理解を深める。また、この時期の幼児は、生活習慣を獲得しながら健康に関しても徐々にセルフケアができる事を目指して育っていく。この実習を通して健康教育を企画・

実施することで、子どもへの成長・発達の特性をより理解すると同時に、将来、専門職として予防活動としての意識を高められることになる。

看護を対象とする保育園での実習に関する先行研究は、保育園活動からの子ども観に関するもの多く<sup>1)</sup><sup>2)</sup>、子どもへの健康教育について看護専門職が行ったもの<sup>3)</sup><sup>4)</sup><sup>5)</sup>の研究が数件報告されている。また、看護学生が主体となった健康教育の取り組みは1件であった。<sup>6)</sup>今回、小児看護学実習の保育園実習で入園している子どもを対象に健康教育に取り組み、学生の学びを明らかにすることと本学の小児看護学実習において健康教育の意義を検討する事を目的とした。

### II. 保育園実習の概要

保育園実習の目的と目標・方法は表1に示す。

本学の3年次の看護学生、1グループ2～3人が1施設3～4回に分かれ、公立保育園10か所です3日間（8：

表1. 実習目的と目標

I. 実習目的
子どもの成長・発達を理解して、健全な育成をめざしてあらゆる健康段階にいる子どもと家族に対して看護が理解できる。
II. 実習目標
保育園実習
1. 健康な乳幼児との関わりを通して、小児の成長・発達を理解して、子どもの特徴を捉える事ができる。
2. 成長・発達に応じた日常生活の理解とその援助ができる。
3. 地域社会における看護の役割を理解する。
4. 発達段階に応じた健康教育を行う。

受付日 2014年11月27日

受理 2015年1月21日

30～16:00)の実習を行っている。

学生による健康教育は、担当クラス(3歳～5歳)において10分～15分以内の短時間を原則として実習最終日に行い、実施時間は担当保育園に一任した。教育テーマは、学生の希望テーマで依頼した。

### 1. 実習前の学生指導

実習開始前の学内では小児実習オリエンテーションを行い、健康教育(ねらい・学生の動き、子どもの活動、実施上の留意点、実施後の評価)について説明を受ける。その後、小児実習までに企画案をグループ毎に作成し、教員に指導を受ける。実習前までグループの中で何回か練習を行い実施するようにした。

### 2. 各保育園での実施にあたって

担当クラスでの初日、園長・指導保育士に企画案を提出する。提出後、指導者から助言等を受ける。時間は保育園の指定時間に実施する。実習中は、実習内容に沿って園児共に生活・遊びながら過ごし、園児を理解していった。終了後、健康教育の評価を行った。

## Ⅲ. 方法

### 1. 研究対象

本学小児看護学実習終了した3年生 85名  
期間は5月～10月 小児看護学実習期間

### 2. 方法

#### 1) アンケート調査

アンケート調査は無記名自記式として各グループ実習の全過程終了後、学内で行った。調査項目は、①テーマを選んだ動機・理由、②対象、参加人数、時間、③目標の達成度、④実施内容、工夫した・留意したところ、⑤子どもの反応、⑥学んだことの6項目について5分程度で回答できるものであった。

2)「保育園実習記録」「実習を通しての学び」の記述内容のレポートで行った。

### 3) 分析方法

アンケート集計は単純集計とした。学生の学び内容の分析のため、記述内容に着目し、意味ある文節を取り出した。これを1つの意味を持つ文節を毎に分け、各文節内容を要約し1データとした。1データに要約された内容の類似するものをまとめサブカテゴリーとして、さらにカテゴリーへと抽象化した。

## 3. 倫理的配慮

研究にあたり、学生にアンケート、実習記録と学びのレポートを使用する事について、研究目的と使用可否の判断は自由であること、記録用紙の使用承諾の有無が成績に影響しない事、プライバシー保護への配慮について説明し協力を得た。その結果、82名(96%)から記録の使用が許可された。

## Ⅳ. 結果

### 1. 健康教育の実施状況

公立保育園10か所で実施した。

1) テーマ・対象年齢・媒体は表2に示す。

テーマは、「手洗い・うがい」7件、「歯磨き指導」4件、「熱中症予防」2件、「交通安全」2件、「栄養指導」1件の16であった。健康教育の内容は、「手洗い、うがい」のテーマが多かったため「朝の会」で実施した保育園が多かった。対象年齢は、全年齢で1歳～6歳にわたり、人数は20～30人、多い保育園では、全員の参加が得られた。媒体は、紙芝居が11件で多く、子どもの好きなキャラクターを登場させていた。歯磨き指導は、歯の模型と歯ブラシを用いてデモストレーションを行った。手洗い・うがいはCDを流し、また、園児の知っている歌の替え歌にしながら園児とうたいながら楽しく行っていた。

2) 学生の満足度について

実施後の満足度については、80%以上と答えている学生は、65名(79%)であった。70%以下と答えた学生は、16名(19%)であった。70%以下の理由としては、準備と練習不足であったと答えていた。実施後、学生たちは

表2 健康教育の実施内容

テーマ	対象年齢	人数	媒体
手洗い・うがい	4歳～5歳	20～30人	紙芝居・cd
歯磨き	4歳～5歳	40～50人	歯の模型・歯ブラシを用いて、パペット人形
熱中症の予防	0歳～5歳	40人	予防物品準備(水筒・タオル・帽子)
交通安全	3歳～5歳	20～30人	紙芝居
好き嫌いをなくそう	4歳～5歳	40人	紙芝居・ポスター

園児皆が一生懸命参加してくれて、うれしかった、給食の前に歌いながら手洗いをしている園児の姿を見て達成感があったと答えている。

## 2. 健康教育に実施による学生の学びの内容

学生が健康教育の実施から学んだ内容を表に示す。データ分析した結果、学びの内容は「健康教育の内容」「健康教育の方法」「健康教育の実施」「効果的な健康教育の方法」「子ども理解」「幼児を対象とした健康教育の意義」6 カテゴリーに分類された。(表3別紙参照)

### 1) 健康教育の内容

「健康教育の内容」「対象の生活や成長・発達、遊びに応じた内容」「対象の健康問題に応じた内容」「教育内容の継続を意図した内容」の3つのカテゴリーで構成された。

学生は、企画書案を作成する上で象の年齢、理解度用いる事の出来る言葉、集中力の程度、成長発達や遊びの段階を既習した講義を理解した上で教育内容を検討する事が必要性について最も多く学んでいた。また、対象となる幼児の普通の生活の様子や考えを捉え、これを指導内容に組み入れることで理解が得やすくなることを学んでいた。「教育内容の継続を意図した内容」では、学んだ内容を今後の生活に生かしていくために、幼児および家族が取り組める具体的な方法を教育内容に加える事が必要であると学んでいた。

### 2) 健康教育の実施

「健康教育の実施」は「教育の実施計画の吟味」「対象の視点にあった展開」「担任の保育士との連携による対象幼児への理解」「継続的な教育の実施」「教育の実施の困難さ」の5つのカテゴリーで構成された。

学生は、健康教育を行うためにはより多くの知識をもつこと、教育内容とその提示の方法の検討、対象の興味・関心を引き出すことなどを考慮し計画を立てて行うことの必要性を学んでいた。また、日ごろから幼児に接している担当の保育士と連携し教育内容に助言を得ていくこと、集団としての幼児の特徴を把握することの必要性を学んでいた。「継続的な教育の実施」は、一度の教育では行動変容につながる事は困難であるので継続した教育の必要性を学んでいた。また、1つのクラスでもこどもの成長・発達、理解度は個人差があるため、集団として同時に働きかけることの難しさを学びの中で感じていた。

### 3) 健康教育の方法

「健康教育の方法」は、「要点を絞った教育」「子どもの集団の特徴に合わせた方法の検討」「家庭への働きかけ」「教材へ示方法」「子どもたちが考える事ができる方法の検討」の5 カテゴリーで構成された。

学生は、与えられた短時間の中で幼児達にわかりやす

く伝え、健康教育の目的を達成するためには、主題を絞って教育を行う必要性を学んでいた。

### 4) 効果的な健康教育の方法

「効果的な健康教育の方法」は、「五感に訴える教材提示」「参加型の教育方法」「理解状況に応じた柔軟な展開」「説明の工夫」の4つのカテゴリーで構成された。

学生は、視覚や聴覚に訴える教材(紙芝居・音楽・ピアノ演奏)を作成し、これを用いて健康教育を行ったことで幼児に興味・関心を引き出す教育内容が伝わりやすいこと、また、教育実施側も教材を活用することでスムーズに教育を進行しやすい事を学んでいた。

また、話を聞くだけでなく、園児が学生共に一緒に体験学習する事でより興味・関心を高める事ができる事を学んでいた。「理解に応じた柔軟な展開」では、教育を行う中で、発問やクイズ形式をしながら理解状況を把握する事や、教育側が常に意識しながら幼児の反応からその理解状況を捉え、必要時には説明を加えていく等臨機応変に対応していく事が必要である事を学んでいた。教育対象者の発達段階に応じて、教材の提示の方法には工夫や繰り返し行うことが必要である事を学んでいた。

### 5) こどもの理解

「子どもの理解」は「対象理解の方法」のカテゴリーであった。「対象理解の方法」は、学生は実習開始前には、教育対象の幼児期の発達段階や基本的な生活習慣の獲得のための内容を事前に学習をして実習に臨んでいる。しかし、受け持ちした幼児達は教科書で理解した幼児とのずれや個人差がかなりあることに気づき、実際に幼児と関わる中で実態を把握することを学んでいた。担当の保育士から保育園での生活の様子や健康教育への指導、また園児の性格、家庭状況等の説明を受けることで理解ができてきた。

### 6) 健康教育実施の条件

「健康教育の条件」は、「教育実施者の姿勢の重要性」「保育士と子どもの信頼関係の確立」「子どもが学ぶ環境づくり」の3つのカテゴリーで構成された。

「教育実施者の姿勢の重要性」は教育を行う側の意欲・姿勢などが、教育を受ける幼児に影響を与える事を学んでいた。「保育士と子どもとの信頼関係確立」は、ふだんからの保育士と子どもとの信頼関係があってこそ指導的に関わることができ事を学んでいた。「子どもが学ぶ環境づくり」は日頃から園児達が楽しく遊び・学ぶこと環境づくりができている事が前提として教育が行われる事を学んでいた。

### 7) 幼児を対象とした健康教育の意義

「幼児を対象とした健康教育の意義」は、園児達は素直で楽しく話を聞いてくれた体験から、幼児時期は基本的な生活習慣の獲得する時期でもあり、健康教育を行うことは正しい知識を身に付けていく機会を作る意義を学ん

でいた。

## V. 考察

### 1. 健康教育の実施による学習効果

#### 1) 幼児期の成長・発達段階の理解

小児看護学実習の期間と学習内容を変更し、健康教育を追加・実施した、学習内容を追加することで、従来の見学中心の実習から実践を伴う主体的な実習なる事を期待した。また、健康教育の実施には、教育内容に関する知識を整理するだけでなく、教育対象の理解が不可欠であることから、先行研究の石井<sup>7)</sup>らの研究においても、「健康な子どもの成長・発達の理解が不足している課題が改善された」という報告もあり、期待した。本研究の結果から健康な子どもの成長・発達の理解は深められた。学生は健康教育内容を考えていく段階で、教育対象である「幼児期の生活、成長・発達、遊びに応じた内容」「対象に応じた健康問題」「こどもの理解」などの学びをみても、対象の年齢、理解度を得られる言葉の選択、集中力の程度、成長発達や遊びの段階を考え企画書を作成し実施することで子どもへの成長・発達の理解は深まったことが明らかになった。実際、実習前には、子どもの成長発達段階、および学習段階をふまえた内容準備をしていたことや、用いる言葉の選択も意識して取り組んでいたことから、対象理解につながった学習を深めていったと考えられる。また、健康教育を実施する前に、実習3日目に依頼し、担当保育園の園長・担当保育士には、学生が作成した企画案や教材について具体的な指導をして頂くことを依頼している。その時、実際、学生は担当保育園で園児と実際関わる体験や担当保育士からテーマに関連して具体的な園児の健康実態に関する資料の提示、保育園での健康教育の取り組んでいる内容の指導を受けることから対象の理解を深めていることが明らかになった。

#### 2) 健康教育の方法

健康教育の方法として、学生が学んだ内容は次の2点が挙げられた。1点目は、集団を対象とした教育方法の基本事項に関すること、2点目は教育技法に関することであった。

1点目の集団を対象とした教育方法の学びの場であるクラス単位で対象を捉えて理解することが挙げられた。対象年齢を4歳～5歳と選んで参加した保育園もあったが多くの保育園では全員参加となり、乳児では理解できなかったと考えている。家庭への働きかけを視野に入れて教育方法を行うこと、単発の教育に終わらず園児の成長・発達に応じた継続的な働きかけを行うこと、そのためには担当保育士だけでなく、保育園の園長・他の保育士との連携を図り、教育内容の理解を得て指導が継続される働きかけを行う必要性を挙げていた。これらは看

護職が行なう健康教育の特徴、すなわち対象の生活全体を捉えて、それに即した働きかけを行うことの学びであったことと考える。

2点目の健康教育の技法では、教育実施中に対象の反応を捉え、自らの教育方法を評価し改善を加えることでその目的に添った教育になることを学んでいた。また、参加型の教育方法を用いることや園児達と一緒に考えさせる場面、さらに音楽を交えて楽しく、飽きさせない工夫、学んだことを確認・約束事する場面等を見ても、幼児期のある対象への教育方法として適切なものであると考えられて、学生は健康教育を自ら実践することを通して確認していったことが明らかになった。

### 2. 本学の保育園での健康教育の意義

看護系大学の小児看護学実習の概要に関する調査報告によると、小児対象をした看護学実習は、病棟実習について保育園で多く行われている。本学においても健康な小児の成長・発達を理解し病棟で疾患を持つ小児を受け持ち看護を展開することを目的としている。他の大学では、保育園でなく小中学校での実習もあり、健康児を中心に学童期の子どもの健康課題を捉えることを目的としているなど様々な取り組みがされている。

本学の实習において、看護の専門職として、各段階の対象の子どもの生活指導や健康教育に関わっていく責任と課題がある。そのためには健康教育の実践能力として健康教育の技術を習得していくことが挙げられる。本学において小児看護学実習で健康教育の実践を行うことは、将来、看護専門職としての意識を高め、健康課題に取り組んでいける学習での学びの内容と機会であった。今回の学生の学びの内容から小児看護学実習の中で重要な意義があると考ええる。

## VI. 結論

本学の小児看護学実習において実習内容に新たな健康教育の実施を加え、これらの学んだ内容を明らかにした。その結果、「健康教育の内容」「健康教育の実施」「効果的な健康教育の方法」「子どもへの理解」「健康教育の条件」「幼児を対象にした健康教育の意義」の6カテゴリーが分類された。これの内容から子どもへの理解が深まった。また、健康教育を実施したことで専門職としての意識が深められる経験であった。

## VII. おわりに

今回、小児看護学実習施設の閉鎖や縮小に伴い、実習期間を延長し健康教育を加え実施した。見学中心の実習が主体的な実習と変化し、子どもへの理解が深まりまた、達成感のある実習になった。学生が健康教育を実施する際、健康教育についての講義や演習時間を設けてほしい。

保育園でどんな健康教育に取り組んでいるのかの情報がほしい等の要望がでていた。事前に健康教育に関する学習する機会、イメージがわくような視聴覚教材・資料の提示の工夫が必要である。また、保育園からは、同じテーマが重なったりしたので、違ったテーマで行ってほしいとの要望もあったため、同じ保育園では、テーマが重ならないように調整・指導する必要があると考える。

## 謝辞

本学での新しい実習内容に協力して下さった保育園施設の皆様・子ども達、意欲的に参加してくれた学生たちにここから感謝申し上げます。

## Ⅷ. 引用・参考文献

- 1) 矢田昭子他：保育園実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響、島根大学医学部紀要、30、P 35～42、(2007)
- 2) 白水美保他：保育園実習前後の看護学生の子どものイメージの変化、鹿児島大学医学部保健学科紀要、18、P 15～21 (2008) 松永美和子他：5歳向けの「自分の体を知ろう」健康教育プログラム消化系の評価、聖路加看護学起用、33、P 48～54 (2007)
- 3) 大久保暢子他：幼稚園・保育園年長児向けのプログラム「自分の体を知ろう」に対する評価指標の検討、聖路加看護大学紀要、34、P 36～45 (2008)
- 4) 佐藤公子他：保育園における幼児の効果的な手洗い指導の検討、小児看護、34 (3) P 392～396 (2011)
- 5) 上原和代他：看護学生による保育所の子どもたちへの健康教育の試み、沖縄県立看護大学実践紀要 1 (1)、P 8～14 (2014)
- 6) 上山和子他：対象の健康レベルの違いによる小児看護実習の学習内容の分析と構造化―病棟実習と学校保健室実習の学習内容の検討―、日本小児看護学会誌、8 (2)、P 73～78 (1993)
- 7) 石井康子他：学校実習からの学び、岐阜県立看護大学紀要、5 (1)、P 65～70 (2005)
- 8) 石井康子：学校実習からの学び (第2報) 岐阜県立看護大学紀要、7 (1)、P 3～9 (2006)
- 9) 飯村直子他：看護系大学における小児看護実習の概要、日本小児看護学会誌、9 (1) 16～21 (2000)
- 10) 北村恵子：同一テーマによる創作オペレッタ作りの教育効果、上田女子短期大学紀要26、P 59～75 (2003)
- 11) 高橋君子他：看護学生の保育園実習におけるお楽しみ快 (遊びの) の学び、岡山県立大学保健福祉部紀要12 (1) P (2005)
- 12) 宇都弘美：幼児教育の健康教育、鹿児島女子短期大学紀要、第42号、P 51～62 (2007)

- 13) 小出美美子他：小児実習における装飾活動について、静岡県立大学短期大学部研究紀要、第10号、P 183～193 (1996)

著者への連絡先：原田美枝子 〒238-8580 横須賀市  
稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部看護学科  
TEL：046-822-8790  
E-mail：harada@kdu.ac.jp

表 3. 健康教育実施からの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の要約例
健康教育の内容	対象の生活や成長・発達 発達段階・課題に応じた内容	成長・発達、発達段階・課題を理解し、小手に応じた説明方法や教材を用いた健康教育を行う 対象の生活や考えを捉え、これに即した教育内容を取り上げる 内容は多くでなくても、内容を掘り下げる必要がある
	対象健康問題に応じた内容	指導内容には、対象に多い問題を取り上げる 対象が抱えている問題や必要だと思った事を把握し、教育内容とすることが重要だ。
	教育内容の継続を意図した内容	子どもができる方法を提示する。 学習内容が継続できるための教育内容の工夫が必要である。 子どもが指導内容の必要性を理解して実行できる内容とする。
	健康教育の実施	教育の実施計画の吟味 健康教育を行うには知識、話す順序、声の大きさ、実施時間等の考慮しながら行うが必要である。 対象の視点に立った展開 子どもの視点に立ち、興味ある内容になるように工夫が必要である。 子どもの知っている歌を歌いながら、楽しくできる工夫が必要である。 子どもの発達年齢に応じて根拠やプロセスを詳しく説明する必要がある。 子どもには、学習内容プロセスを丁寧に説明する事が理解しやすい。
健康教育の実施	担当保育士との連携 子どもへの理解	担当保育士から日頃の子どもの様子を聞き、担当保育士から助言を得る事が大切である。子どもに即した内容となる。
	継続的な教育の実施	一度の指導だけでなく、繰り返し指導することで定着し、行動変容できていく 日頃から、保育園でも必要な健康教育は継続してしていく必要がある。
	教育の実施の困難性	発達年齢がさまざまであると、健康教育実施の困難さがある。 発達段階を分けて実施しないと理解できない子どもが出てくる。(0歳～6歳全員参加)
	健康教育の方法	要点を絞る教育 対象に必要な内容を明確に置くことが必要である。 家庭への働きかけ 保育園だけでなく、家庭に帰ってからも健康な生活を送る必要があるため家族への働きかけも必要である。 教材の提示の工夫 子どもの興味があるキャラクターの媒体を用いると子ども達の意欲がわく 紙芝居は、みんな揃って聞けることで共通理解ができる。 教材の提示する際は、わかりやすく、大きく、ひらがなで丁寧に書くことが効果的である。 子どもに伝わりやすい言葉や表現の工夫が必要である。
健康教育の方法	子どもの集団の特徴に合わせた方法	指導後、保育士たちが、子ども達に声を掛けあうことで向上する意識が湧きあがる 集団の特徴への働きかけが大切である 子どもが遊んでいる時にも、声掛けをしながら意識させていくことが大切である。
	子ども自身が考える事ができる方法	説明・情報提供、指導には子ども自身が考える事ができるように指導を行う 必要がある。 対策行動を話し、自らできる方法を一緒に考えることが大切である。
	効果的な教育方法	視覚に訴える教材提示 視覚に訴えるたり、根拠を示すことが興味関心をひきだすことが大切である。 子ども達がよく知っている歌を歌い、音楽を流すことで子ども達は楽しく学べる。 参加型の教育方法 一方的に説明するのではなくクイズ形式、発問しながら進行させると子どもたちは意欲的に学べる。 子どもとコミュニケーションを取りながら学習を展開させる。 子どもの反応を見ながら、展開していくことが必要である。 皆が歌えるように、紙(ひらがなで大きく)に書いて黒板に提示すると参加しやすい。 デモンストレーションを行うことで、よりイメージが付き、積極的に理解しやすく、実施しやすい。
	説明方法の工夫	わかりやすく・大きく、声のトーン、具体的に説明する事が大切である。 子ども達の日常生活の様子や行動を話しながら説明するとより理解ができる。 まとめとして、再度、繰り返したり再提示して伝えることは確認につながる。 心への働きかけの工夫が大切である。(実感する) 子どもの集中する時間は限られているので、飽きさせない説明と時間配分の工夫が必要である。
子どもの理解	対象理解の方法 実習で子ども達に関わることで、成長・発達の実態が理解できた。 子どもと保育士の関わりを見ながら、子どもの関わりや話を学んだ。 健康な子どもとの関わりから健康障害の子どもへの関心が広がった。	
健康教育実施の条件	教育実施の姿勢の重要性 事前学習を行い、正しい内容を伝えていくことが実施者の姿勢である。 指導するには、日頃から子どもと保育士との信頼関係ができてきている事が重要である。 日頃から、健康教育実施者としての学習(指導方法)が必要である。	
幼児期の健康教育の意義	幼児期からの健康教育は必要である。 生活習慣をきちんと身に付けていく教育は大切である。	